

F/T12

FESTIVAL/TOKYO



言葉 / 演出 : 村川拓也
words / Direction: Takuya Murakawa

11/8 (Thu) - 11/11 (Sun)
東京芸術劇場 シアターイースト
Tokyo Metropolitan Theatre, Theatre East



2020年オリンピック・
パラリンピックを日本で!



インタビュー

カメラを持つ演出家・村川拓也

気鋭の若手演出家にして映像作家・村川拓也。昨年のF/T11公募プログラムで上演した『ツァイトゲーバー』では、障害者介助の現場に取材を重ねて構築した作品と手法が共に注目を集め、本年は主催プログラムへと抜擢された。作品数もまだまだ少ない村川のアーティストとしての変遷、自身の展望とはどのようなものか。東日本大震災の被災地を旅したことから立ち上げた、新作『言葉』への取り組みとともに聞いた。

——村川さんの創り手としての出発点は京都造形芸術大学かと思います。遡りますが、まずは大学の志望動機から伺えますか。

映像作品を見ることは好きでしたが、創る側になりたいというような明確な意志はなかったんです。ただ4つ上の兄が地元の大学で映像を学んでいて、やはりカッコよく見えたんでしょうね。似たような大学を選んでいて、と。あとは、一般的な大学に入り、卒業後は就職などして普通に生活するという路線から逃れたい気持ちも、漠然とあったと思います。

——在学中に影響を受けた方はいらっしゃいますか。

最初は当時造形大にいらした宮沢章夫さん。僕が入ったのは映像・舞台芸術学科という、映像と舞台芸術を並行して学ぶ学科で、演劇に関して全く無知の僕も、宮沢さんの授業を取らなければいけなかったんです。でも、宮沢さんの授業は抜群に面白かった。一見、演劇の材料にはならなそうなんでもない事物、俳優と呼ぶにはほど遠いそこらへんにいる若者などを題材

に演劇を創ってしまう。「これなら僕にも出来るかも」と、演劇に対するイメージが変化し、演劇に関する興味を一気に掻き立てられました。

映像では、ドキュメンタリー映画の監督・佐藤真さんに映像に関するあらゆることを勉強させていただきました。今でも佐藤真さんの映画はよく観ますし、映画論からつねに新しい発見をさせてもらっています。あと、短期の授業をして下さった同じドキュメンタリー映画監督の森達也さんにも影響を受けました。森さんは一人手持ちカメラで撮影するような作品を撮っていたので、「自分で撮る」ということへのきっかけを作っていたように思います。

——大学卒業と同時に、三浦基氏率いる劇団「地点」に入団されていますね。

三浦さんから突然電話がかかってきて勧誘を受け、何も分からないまま二つ返事で劇団に入る事になってしまいました。在学中、三浦さんの作品を一度手伝ってはいたのですが、いまだになぜ僕だったのか理由は聞いていません(笑)。5年間所屬して演出助手をしながら、現場での創作過程、集団の維持の仕方、演劇の社会性について、演出家がどういう仕事なのかなど、具体的な演劇の勉強をさせてもらえたと思います。

——大学、「地点」、そして独立。入学から現在までを数えても10年余りですが、その中でのご自身の創作スタイルの変化について、どのように認識していますか。

まだ数えるほどしか作品がないのですが、演劇の最初の二作には戯曲やテキストが先にあり、照明・美術・音響といったスタッフワークも整え

たスタンダードな作り方をしていました。ただ、それがだんだん自分には合わなくなっていったんです。

だから、要らないものを無理に使うのはやめたんです。「演劇はこう創るものだ」という縛りから抜け、自分の作品創りに必要なものは何かを考えていった。すると、道具も出演者もスタッフもどんどんシンプルな状態になって、それはつまり演劇の本質、「演劇が持っている本来の力」を探究していく事に繋がるのではないかと思うようになりました。

今その文脈で創作に際しては要らないものを捨て続け、「それでも演劇と言えるかどうか」というを見極めるのが、僕の中では勝負だと思っています。

対象に自分自身をさらし

アイデアの萌芽を得るのが自分の創作の始め方

——映像と演劇を学び、その両方に魅力を感じた村川さんが、映像作品も撮り、なおかつ映像の手法を用いながら演劇という生の表現にこだわるのはなぜでしょう。

映画という表現には「過去」のほうに向いているというか……「過去」を扱うのに適したメディアだ、と僕には思えるんです。演劇でも、もちろん古典と呼ばれる古い戯曲や、歴史、記憶といった「過去」に拠るものを題材にしますが、むしろ演劇は「現在」を描くために良い表現方法だと思います。それも「現在」だけ。ただひたすら「現在」だけを扱えるメディアじゃないかと思っています。まあ、感覚的なことなんです。



『ツァイトゲーバー』(2011年)
© 雷田了平



南三陸ドキュメンタリー映画「沖へ」(2012年)
東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県本吉郡南三陸町の江戸時代から続く互助コミュニティ「伊里前契約会」の会長・千葉正海さんとその家族の、震災後の「日常」を撮ったドキュメンタリー。

僕は以前から民俗学者の宮本常一の著作や仕事に興味があって、これまでも何度か作品の題材にしています。彼は日本中の僻地と呼ばれるような地域に分け入り、フィールドワークを重ねた人ですが、そういう「過去」に記録された言葉を、現代に生きる人間がどうやって喋るのかを考えた時、まずイメージできるのが、「喋れなさのリアリティ」ということになると思います。「過去」の言葉と現代の人間の、距離をみせるような作品になるだろうと思うわけです。僕が以前創った作品はそこまで止まりだったかもしれませんが、でも、本当はもう少し違うことをやりたいと思っていました。それは、「過去」に書かれた言葉の、その時の情景をそのままダイレクトに舞台上で再生できないかということです。それは単に役者が役にのめり込んで喋れば達成されるものでは絶対ないと思いますし、ひょっとするとその言葉を使わない方が、その時の情景に迫れるのかもしれませんが、とにかくその「過去」に書かれた言葉の、その時の「現在」をどうやら今の「現在」で再生できるかといったことを探究したい。それがまさに、今回の『言葉』をつくりながら考えていることなんです。過去を現在との距離から語るのではなく、過去の現在性を再生させるという、演劇ではほとんど不可能な領域に向かっているのかもしれませんが。

——震災を題材にした創作物が続々と発表されるなかで、現地取材を行いながらそれを具体的に描くのではなく、「言葉」や「対話」という普遍的かつ抽象的な切り取り方を選んだのはなぜですか。

今回に限らず、「対話」には元々関心がありました。公演のポストトークなどを聞くのも好きで、大勢の人の前で他者と対話していると、相手の言葉に対してなぜこの人はこの言葉を選んだのか、その裏にある理由や思考までさらされるようで、非常にスリリングじゃないですか。

『沖へ』の撮影のためのインタビュー中、僕は「全然会話ができていない」という感覚にずっと囚われていた。被災地では色々な方と喋り、また基本的には皆さんよく喋るのですが、その言葉に行き先がない感じがしたんですね。切れ切れでどこにも届かない、行き場のない言葉が、津波で更地になった所にビッシリ生い茂る夏草のように充満し、溜まっていく。そんなイメージを再現できるような対話や言葉を抽出し、舞台上に乗せることで、観客の中にも無数の言葉が生まれ、むさ苦しいほど充満していくような作品を創りたいと思っています。

——そのために抽出した言葉は、撮影時に採取したものでか。

いえ、出演者たちと夏に1週間ほどかけて、青森から福島まで被災地を回ったんです。毎日平均6時間くらい歩き続けで、歩行速度を時速4キロとすると7日間で一人計170キロくらい歩いたことになります。彼らには歩きながら、目にした光景や自分が感じたことをメモしてもらい、そのメモにある言葉から、作品を構成しています。

被災地に限ったことではないと思いますが、現地を訪ね、目の前の様々な印象を捕まえて言葉にしようとして突き詰めて考えていくと、どんどん深みにはまっていく感じがあり、それを回避す

るために“歩き倒す”というような過酷な行程を敢えて組みました。歩き疲れてヘトヘトになった身体と頭からは、シンプルで正直な言葉しか出て来ませんから。それは、先に話した宮本常一の文章などを読んでいても感じることで、著作の中に時折破綻したような奇妙な文章があるのは、書き手の身体性、旅の中での疲れが書かせたものじゃないかと前から思っていたんです。

——そこには村川さんの言葉も加わるのですか。

いえ、僕は出演者の言葉に繋がるための被災地の景色や印象は記憶してきましたが、直接自分の言葉を加えるつもりは、今のところありません。自分の記憶と経験をツールに、俳優の感覚と身体言語をいかに広げ、活かして構成するかが演出の中核だと思っています。

——自身を対象にさらし、現地にも同行したうえで、『言葉』と題した作品にご自身の言葉を加えない。ドキュメンタリーのスタンスとは違う、対象に敢えて踏み込まない距離感がそこにはあるように思えるのですが。

そんなことないです。かなり踏み込んでいるというか、こういう作品の作り方をしていると、現地の被災者の方にはもちろんですが、取材をした出演者達にもずかずかと踏み込まざるを得ないし、そこに対立や葛藤は常にあります。でも、確かに僕は……ある距離は取っているような気がします。俳優に対しても、題材となる事象に対しても。ある美術家の方に「村川君は常に目の前にカメラがあるね」と指摘されたのですが、それはすごく僕のことを言い当てていると思いました。

——対象を常にカメラ越しに見ている……とい

うか、「カメラがないと見えないものを見ようとしている」と言うほうが適切でしょうか。

……そう、ですね。カメラは対象に迫るだけでなく、距離を取り、対象をありのままというか、ただそのまま見つめるためにも有効で、それがそのまま、僕の創作スタイルに繋がっています。時にはその距離の取り方を「残念だ」と言われることもあるのですが、そこは性格なので仕方ありません(苦笑)。

ただ、そのことで舞台上には対象に直接接していこうとする出演者と、カメラ越しの僕という二つの距離から見たことを付加できるわけで、それが自ずと作品に幅や深さを持たせることになる。だから当面はこの創り方に、こだわっていきたいと思っています。

(10月15日 / 取材・文：尾上そら)

村川拓也の仕事

2005年

ドキュメンタリー映画『迷と惑』

京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科奨励賞受賞、
台湾・Wushantou ドキュメンタリーフェスティバル正式招待

2008年

地点上演実験シリーズvol.1『話セバ解カル』
(共同演出：三浦基／ART COMPLEX 1928)

2009年

『建築家とアッシリアの皇帝』(構成・演出／アトリエ劇研)

2010年

『小走り／声を預かる』(演出／アトリエ劇研)



『建築家とアッシリアの皇帝』(2009年)



『小走り／声を預かる』(2010年)

2011年

映像作品

『ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず』
(作・演出／MOVING-京都映像作品上映会参加作品／
京都シネマ)

『移動演劇 宮本常一への旅 地球4周分の歌』(構成・演
出／犬島・野外(岡山))

『ツァイトゲーバー』(演出／F/T11公募プログラム／シアター
グリーン(東京))

2012年

『無人島』のちに『対話』(演出／大阪市立芸術創造館)
芸創 CONNECT 参加作品 優秀賞受賞

南三陸ドキュメンタリー映画『沖へ』(演出／MOVING2012-
京都映像芸術祭参加作品／京都シネマ)



『無人島』(2012年)

村川拓也：演出家・映像作家

1982年生まれ。2005年京都造形芸術大学卒業。09年まで地点に演出助手として所属。独立後は演出家として活動、ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品をさまざまな分野で発表している。主な作品に『移動演劇 宮本常一への旅 地球4周分の歌』(引用文献：宮本常一／11年)、『ツァイトゲーバー』(F/T11公募プログラム)、ドキュメンタリー映画『沖へ』(12年)、『無人島』(後に『対話』に改題／芸創 CONECT vol.5 優秀賞受賞／12年)など。



演出：村川拓也

出演：工藤修三
前田愛美

手話通訳：内海美樹
木津三恵子、高井恵美(豊島区手話通訳者連絡会)

照明：葭田野浩介(株式会社 流)
音響：小早川保隆
映像：三上亮
舞台監督：浜村修司
制作：外山りき、山村麻由美
協力：千葉葵美香、武田真由美、豊永丈尋

製作：フェスティバル/トーキョー、村川拓也
主催：フェスティバル/トーキョー

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也
制作：小森あや
インターン：伊藤芽依
フロント運営：藤田晶久
プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/Tクルー：安達彩、一ノ瀬貴志、鈴木智香子、中村みなみ、永井彩子、
能戸みな美、花田雅美

Direction: Takuya Murakawa

Cast: Shuzo Kudo
Manami Maeda

Sign language signer: Miki Utsumi
Mieko Kidu, Emi Takai (Toshima Sign-Language Interpreter
Contact Association)

Lighting: Kosuke Ashidano (RYU Inc.)
Sound: Yasutaka Kobayakawa
Video: Ryo Mikami
Stage Manager: Shuji Hamamura
Production Co-ordinator: Riki Toyama, Mayumi Yamamura
Co-operation: Fumika Chiba, Mayumi Takeda, Johji Toyonaga

Produced by Festival/Tokyo, Takuya Murakawa
Presented by Festival/Tokyo

F/T Staff
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinator: Aya Komori
Trainee: Mei Ito
Front of House: Akihisa Fujita
Program Director: Chiaki Soma

F/T Crew: Aya Adachi, Takashi Ichinose, Chikako Suzuki, Minami Nakamura,
Sayako Nagai, Minami Noto, Masami Hanada

ポスト・パフォーマンス・トーク

11月9日(金) 村川拓也 x 想田和弘(映画監督)

フェスティバル/トーキョー組織委員

Festival/Tokyo Organization Committee

| | | | |
|-------|----------------------------------|----------|-----------------------------------|
| 天牛大生 | 振付家、演出家 | 高野之夫 | 豊島区長 |
| 萩田伍 | アサヒグループホールディングス株式会社代表取締役会長兼 CEO | 市村作知雄 | NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 会長 |
| 扇田昭彦 | 演劇評論家 | 吉末昌弘 | 豊島区文化商工部長 |
| 永井多恵子 | 社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長 | 八巻規子 | 豊島区文化商工部文化デザイン課長 |
| 鶴川希雄 | 演出家 | 大沼映雄 | 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長 |
| 野田秀雄 | 演出家 | 裕正人 | 公益財団法人としま未来文化財団 部長 |
| 野村高 | 狂言師 | 蓮池奈緒子 | NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 代表 |
| 福原義春 | 株式会社資生堂 名誉会長 | 相馬千秋 | NPO 法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター |
| | | 監事 | 豊島区総務部総務課長 |
| | | 法務アドバイザー | 榎井健策、北澤尚登 (弁護士/法律事務所) |

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、
東京文化発信プロジェクト室、東京芸術劇場、公益財団法人東京都歴史文化財団、
公益財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee
Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Authority (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, Arts Network Japan (NPO-ANJ)

共催：社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、
ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、チノコト株式会社、株式会社白水土社

Special co-operation from SEIBU HIGASHIKUJINDEN, TOBU DEPARTMENT STORE HIGASHIKUJIN, Sunshine City Princess Hotel, Hotel Metropolitan, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakushusha Publishing Co., Ltd.

協力の場：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会

In co-operation with The Tokyo Chamber of Commerce and Industry, Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、
有限会社ネビュラエストラサポート (公募プログラム)

PR Support: Poster/Hari's Company, Nebula Extra Support Co., Ltd. (for FT/ Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3 FM、新潮、ART IT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3 FM, SHINCHO, ART IT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年(2012年)10月27日(土)～11月25日(日)



フェスティバル/トーキョー実行委員会

Festival/Tokyo Executive Committee

| | | |
|----------|-----------------------|-----------------------------------|
| 名誉実行委員長 | 高野之夫 | 豊島区長 |
| 実行委員長 | 市村作知雄 | NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 会長 |
| 副委員長 | 吉末昌弘 | 豊島区文化商工部長 |
| 委員 | 八巻規子 | 豊島区文化商工部文化デザイン課長 |
| | 大沼映雄 | 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長 |
| | 裕正人 | 公益財団法人としま未来文化財団 部長 |
| | 蓮池奈緒子 | NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 代表 |
| | 相馬千秋 | NPO 法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター |
| 監事 | 天貝勝己 | 豊島区総務部総務課長 |
| 法務アドバイザー | 榎井健策、北澤尚登 (弁護士/法律事務所) | |

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director of Toshima City
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshida, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hiroyo Onuma, Director of Secretary of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasegawa, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Kazumi Akiwaka, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kenzaki Fukui, Hisato Kitazawa (Koto Dori Law Office)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

Executive Committee Office

| | |
|----------------|-------------------------------------|
| プログラム・ディレクター | 相馬千秋 |
| 事務局長 | 蓮池奈緒子 |
| 事務局長補佐 | 小島寛大 |
| 制作総括 | 武田知也 |
| 制作 | 河合千佳、喜友美麻江、小森あや、相山由香、 戸田史子、藤井さゆり |
| メディア戦略 | 松本花音 |
| プログラム・リサーチ | クラウハイム・ウルリケ |
| アジア事業コーディネート | 小山ひとみ、李丞孝 |
| 票務管理 | 兵原理江、岡内淳 |
| チケットセンター | 佐々木由希子、佐藤久美子 |
| 総務 | 葦原円花、一色真寿 |
| 経理 | 堀久美子 |
| 小制作アシスタント | 小野塚英、砂川史織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以 |
| メディア戦略補佐 | 冠根葉奈 |
| アジア事業コーディネート補佐 | 吉岡真衣子 |
| インターン | 伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里 |

| | |
|---------------------|--------------------------------|
| 技術監督 | 賀川英司 |
| 技術監督アシスタント | 河野千鶴 |
| 照明コーディネーター | 佐々木真衣子 (株式会社フクター) |
| 音響コーディネーター | 相馬千秋 (有限会社サウンドエクス) |
| アートディレクション+デザイン | アジール (佐藤直樹+中澤耕平+谷陽子+穂永明子+菊地昌隆) |
| ウェブサイトを | 濱田真一 + 田中裕也 (株式会社コトワーク) |
| パブリシティ | 平昌子、望月豪宏 |
| 海外広報・翻訳 | アンドリュース・ウィリアム |
| 物販 | 渡辺淳 |
| 編集・執筆 | 鈴木理映子 |
| 編集・執筆 (TOKYO/SCENE) | 影山裕樹 |

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasegawa
Assistant Administrative Director: Hirotoomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators: Chika Orii, Kawai Kiyomi, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujiki
Media Strategy: Kanako Matsumoto
Program Research: Ulrike Krauthelm
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunghyo Lee
Ticket Administration: Rie Kagahara, Yasuko Shihada
Ticket Office: Yumiko Saeki, Kamiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kamiko Tsutsumi
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozaka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanohri, Ai Nakayama
Assistant Media Strategy: Manana Kanami
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Maiko Yoshioka
Trainers: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabei, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki
Technical Director: Eiji Torikawa
Assistant Technical Director: Chihiro Kono
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction+Design: Asyū (Naoki Sato + Kouhei Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada + Yoko Tanaka (Ito+Kawachi)
Public Relations: Masako Taira, Akhиро Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kagayama

FT/クルー：会津麻美、青島美和、安達彩、石引康子、一ノ瀬真志、若城幸志、止村康政、宇都宮千晴、内海ささき、遠藤乃乃子、大泉尚子、大貫啓子、大島愛香、岡崎由子、緒方彩乃、岡本光代、岡本佳子、尾澤奈生、小野千尋、加藤真帆、鹿子不直美、金子穂高、川口 潤、木口七海、木下玉美、金セツム、計智繪、相谷佳美、黒沢友実、黒沢寛子、齊藤美音、齋藤絵里佳、滝澤聖梨、佐藤友香里、佐藤音子、霜島咲子、柴田知子、鈴木智香子、岡島弥生、高橋悠祐、田中友香、寺本深美、照田静香、陶田菜子、水杉彩子、中村真樹、中村みなみ、中山由紀、西岡宇行、能戸みな美、畑端富美、初村和実、花田雅美、早川幸菜、林原菜、人見真央、廣瀬加乃、福原麻梨子、福村 芽生、藤原麻太、船山結菜、増尾志、松嶋理奈、中村早絵、松本雄哉、丸山未来、三橋泰正、岡 勉、矢島翔、船内聖司、山口布紀、山室木園、山分可子、丹野亜希、吉田由貴、米谷今日子、渡辺夏

FT Crew: Mami Aizu, Miwa Oshimura, Aya Akashi, Yasuko Ishikubo, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasunasa Usugui, Chiaki Utsunomiya, Chiaki Utsunomiya, Noriko Ozumi, Ozumi Naoko, Keiko Oga, Aika Omichi, Yuko Okazaki, Aoyu Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Oyamoto, Yoyo Otawara, Chihiro Ono, Maho Rato, Naomi Kaneko, Joy Kaneko, Akane Kawaguchi, Namiko Kiyochi, Tamako Kiyochi, Saorin Kim, Chiyo Kyo, Yoshimi Kiritani, Tomomi Kurokawa, Hiroko Kozaki, Naoko Sakai, Eriki Saito, Eri Sakihama, Yukiko Sato, Kyoko Sato, Mumeo Shimotani, Tomoko Shibasaki, Chikako Suzuki, Yayoi Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Tokumura, Xuru Tani, Sayoko Nagai, Naoko Nakamura, Mimihi Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nakasaki, Mimihi Noto, Fumi Hatase, Kazumi Hatsumura, Masami Hanada, Hanura Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Hommi, Kano Hirose, Mariko Fukuma, Kenta Fujiwara, Yoko Funakawa, Kei Masakawa, Ritsa Matsumoto, Sae Matsuda, Yoya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasunasa Mizuno, Hyemin Min, Aya Tojima, Saei Tanaka, Yuki Yamaguchi, Kizono Yamamura, Masashi Yamawaki, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonemitsu, Sara Watanabe

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会
アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYU)
オペレーション：小松 剛
印刷：アトム株式会社
発行日：2012年11月8日
禁無断転載

お問合せ先
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001
東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内
TEL: 03-5961-5202
HP: http://festival-tokyo.jp/